

ば一貫するものであった。中国の宗派仏教を受容した初期には特に顕著である。この様な新羅の性格は特に花郎道や元暁の和鐸思想にその例を認めることが出来る。

この新羅仏教の性格からいっても金剛三昧経が、新羅の大安や元暁周辺の人々によって作られたものと考えるのが尤も自然である。即ち金剛三昧経は、中国の南北朝から隋唐にかけて重視されたあらゆる経論、各宗の教理教説を殆んど網羅しており、それらを仏説の名のもとに会通統合しようと試みたのが、この経の偽作の動機であったと考えられる。この経自身が別名として「撰大乘経」或いは「無量義宗」と自称しているのはこの事を如実に物語るものである。この経の真偽問題に就いて中国仏教の枠内のみで考える時、禪宗や撰論宗との関係に目がうばわれるが、広く朝鮮仏教に注目するとそこに一つの解答が得られるのである。

天台宗における祈雨

佐々木 令 信

天台宗・承澄の撰にかゝる『阿婆縛抄』は、周知の如く、台密の諸作法・口伝を抄録している。二百二十八巻にわたるその内容は、台密における事相修学の基本的名著といつても過言ではない。その書誌については、切畑健氏の「阿婆縛抄―その成立と撰者承澄―」（『佛教芸術70』）に譲るが、前後約四十年の長きにわた

って起草され、書きととのえられ、弘安年間まで次第に完成のはこびに至ったものである。今あたえられた課題を考える足がりをつかむために仏教全書本によって『阿婆縛抄』に見える祈雨に関する項目を抽出すると次の如くなる。すなわち、熾盛光法日記集（巻第59）・尊勝（巻第60）・仁王経（巻第73）・文殊八字（巻第101）・大随求（巻第107）・水天（巻第107）である。これらのうち、尊勝法と水天供が比較的詳しい位で、ほとんどが祈雨法がその主体ではなく、他の功能に付随して多少でてくる程度であり、東密の阿婆縛抄的存在である『覚禪抄』に較べて祈雨に関する項目はきわめて少ない。試みに『覚禪抄』から祈雨に関する記載のある項目をあげると、七仏薬師・大仏頂下・尊勝下・請雨経・仁王経上・守護経法・聖観音・如意輪・不空罽索・准旃・一字文珠法・随求・不動・孔雀経法・太元法・軍荼利・大威徳・迦楼羅法・水天・舍利といふことになる。

このように、東密の覚禪抄は台密の阿婆縛抄に較べて祈雨法の項目が多岐にわたり、しかも請雨経などその記載内容も詳細なものが多く、それは何故かという点、台密の場合の四箇の大法が、熾盛光法・七仏薬師法・普賢延命法・鎮持夜叉法であり、東密の場合、請雨経法・守護経法・孔雀経法・仁王経法であることに示される台密と東密の性格の相違や、東密に対する初期天台宗の密教受容の遅れを指摘できるのではないか。それはとりもなおさず特に後者にいえることであるが、いかに密教の受容に先きかけて祈雨法がいち早く受容されたかを示している。

左大弁源経頼が、雨僧正仁海の言として『左経記』長元五年

(一〇三二) 六月六日条に、

弘法大師被伝請雨經之法之後、依旱行此法之七人也、大師眞
 雅、聖宝、寛空等僧正、元果、元真等僧都并仁海也

と記している。要するに、天長元年(八二四)空海の神皇苑請雨
 祈禱にはじまる東密の「請雨經法の伝統」をいうのである。その
 伝統は神皇苑に限ってみても、平安末までに三十余の事例を指摘
 できる。それでは天台宗の場合はどうであろうか。延喜二年(九
 〇二)四月座主円珍が仁寿殿で雨を祈った(智証大師年譜)こと
 や、尊意の仏頂尊勝法によるものなど、平安末までで十余例を数
 えることができるけれども、台密の場合、東密における「請雨經
 法の伝統」的な性格のものはみあたらない。

円仁や円珍の請来目録には、「大雲輪請雨經 二卷 不空訳」
 とみえている。『阿婆縛抄』にも当初請雨の項があつたけれども
 今日散佚して伝わらない。しかししづれにしる『諸法要略抄』
 (阿婆縛抄所収)の請雨經法の項に、「近來東寺人一向修之 往
 昔山門又修之」とみえており、鎌倉初期より早い機会に天台宗
 においてすでに請雨經法は行なわれなくなつたといつていい。そ
 の本質を問う余裕はないが、現象面でもらえるならば、請雨經法
 から水天供への移行がみられるのではないかと思う。『白宝抄』
 (水天法雜集)には「水天供者請雨經法最略法也」とあり、先に
 あげた『阿婆縛抄』の祈雨に関するもので最も詳細なのが水天供
 なのである。

天台宗における祈雨の特色の一つとして、史料制約があるも
 のの、宮中御読経による祈雨を想定できるように思う。旱魃にさ

いしての宮中御読経は、天長四年(八二七)を初見として、五十
 三の事例を指摘できる。多くは大極殿で勤修され、限三箇日、大
 般若乃至仁王般若經の読誦が恒例であつた(拙稿「古代における
 祈雨と仏教」大谷学報50の2)。その時の僧侶の宗派について示
 す史料は乏しいのであるが『小右記』寛仁二年(一〇一八)六月
 八日条によれば、その年の大極殿祈雨御読経の員数は「南京天台
 合五百口」であつた。また、『宇治拾遺物語』には「静観僧
 正雨を祈る法験の事」として次の如くいう。

今は昔、延喜の御時旱魃したりけり。六十の貴僧を召して、
 大般若經読ましめ給ひけるに、僧ども黒烟を立てて、驗現さ
 んと祈りけれども、いたくのみ晴れまざりて、日強く照りけ
 れば、帝を始めて、大臣、公卿、百姓、人民此の一事より外
 の歎無かりけり。藏人の頭を召し寄せて、静観僧正に仰せ下
 さるるやう、「殊更召さるゝやうあり。かくの如く方々に御
 祈どもさせ験なし。座を立ちて、別に壁のもとに立ちて祈
 れ。思召すやうあれば、取り分け仰せつくるなり。」と仰せ
 下されければ、静観僧正、上臈共おはしけれども、面目限な
 くて、南殿の御階より降りて、扉のもとに、北向に立ちて、
 香炉を当てゝ祈請し給ふ事、見る人さへ苦しく思ひけり。黒
 烟を立て、祈請し給ひければ、香炉の烟空へあがりて、扇ば
 かりの黒雲になる。上達部は南殿に並びぬ、殿上人は弓場に
 立ちて見るに、上達部の御前は美福門よりのぞく。かくの如
 く見る程に、その雲むらなく大空に引き寒きて、竜神震動
 し、電光大千界に満ち、車輪の如くなる雨降りて、天下界を

結ぶ。見聞の人婦服せずといふ〔事〕なし。帝、大臣、公卿ら随喜して、僧都になしたまへり。不思議の事なれば、末世〔の〕物語にかく記せるなり。(日本古典全書本)

静観とは後の天台座主増命のことであるが、この説話は、宮中における祈雨御説経に多くの天台僧が参画していたことを予想せしめる。『三代実録』貞観十七年(八七五)六月十五日条には、

屈三六十僧於大極殿、限三箇日、転説大般若経、十五僧於二神泉苑、修二大雲輪請雨経法、並祈雨也

とあり、同じく十八日条に

大極殿説経、神泉苑修法、更延二三日、未得一快謝也

とあるように、祈雨のために、大極殿御説経と神泉苑請雨経法が同じ行程をとっている。このことはその後も多くみられるところであるが、そこに「大極殿御説経は台密、神泉苑請雨経法は東密」というような分業的なものを想定できはしないであろうか。

讃岐地方における熊野信仰と風呂

豊島 修

讃岐地方は周防、安芸、美作、伊予等の各地方と同様、石風呂(蒸風呂・釜風呂)が早くから発達したことは周知の事実である。

東讃岐地方にも温室と称する石室の風呂が存在しているが、特に水主の石風呂(現大川郡大内町水主)は村落の熊野三山々麓に設

けられ、それを「熊野権現の風呂」と別称しているのは、讃岐地方の熊野信仰の一端をうかがう上で興味深い問題を含んでいると思われる。以下、水主石風呂を村落の熊野三山との関係において注目し、その宗教的側面を中心に少しく考察してみたい。

『讃州府誌』(巻二)によれば、水主石風呂として「石室アリ疾ヲ療スル温泉ノ如シ」云々とある。近世には治療を目的に利用されたことが知られる。又『医王山日記』(延享四)には、石風呂が古く三ヶ所に存在したことを明記しているが、この風呂が更に、江戸中期迄村落の熊野三山々麓にあり、それを「熊野権現の風呂」と称していた。寛保三年の『水主石風呂記』に「又一説に熊野権現の風呂とも云、水主村三高山ありて南最高嶽に新宮大権現本地 (中略) 西高嶽本宮本地 弥陀北の高根那智本地 徳智本地 なり、此の三の麓に三の石風呂ありしに、唯新宮山下の風呂のミを償(下略)し自他の人あつまり入治養生す(下略)」とある。しかもこの伝承が近世以前から保持されてきたことは、『玉藻集』(延宝五)に「大内郡水主窟風呂上山、那智・新宮・本宮」と見えることから解され、中世には、この風呂が村落の熊野三山と密接な関係にあったと思われる。事実『讃岐府志』上、『全讃史』等の記録によれば、水主村には明徳年中以前、既に熊野三山と石風呂が勧請・創立されていたが、その後一時中絶して、南北朝時代(明徳年中)に熊野系の勧進聖「増畔再興」(讃岐府志等)したことが知られる。それは讃岐地方の熊野信仰伝播の時期と考え併せると、鎌倉末期に小豆島の湯船山蓮華寺に熊野社が勧請されていること^⑧。水主の隣村の与田郷福江に、南北朝初期若王寺が鎮座していること(若一王子